



癸丑
元除遍覽

奉取

5
5719



門
5719
巻



歳具

嘉慶
庚申
年
庫

早稲田
園

青帝

當年番

福寿や猪(ノ)女(ノ)立(ノ)姿

松竹(ノ)心(ノ)根(ノ)の(ノ)辻

空(ノ)う(ノ)ら(ノ)月(ノ)小(ノ)小(ノ)鱧(ノ)を(ノ)ま(ノ)雲(ノ)の(ノ)分

春景

夕(ノ)叶(ノ)や(ノ)日(ノ)の(ノ)懐(ノ)の(ノ)中(ノ)の(ノ)序

守歳

身(ノ)を(ノ)持(ノ)つ(ノ)て(ノ)の(ノ)ま(ノ)の(ノ)心(ノ)之(ノ)能(ノ)練(ノ)汁

昭和五年
三月二日
古田壽吉氏
長男友太郎
氏奉贈
早稲田園

素峰

素丸

桂洲

素峰

正端

旁看 溜濱菴

人之今明餅小片に始る

素丸

乃盤ため永遠素汁膝

蛙水

長閑さゆも凍銀も若く代の

序跋

祭日

心も人衣下服不素子

素丸

大年

下も又八十二の
齋と建て

恙か入日唱く如大海日

おろ

歳始

四季 播子小公勢と播り又の素子

源右 此に於けるは素子の素の初

譲 素子 我を素子の盤梅ん

素丸

圓形小者の體素 素まをせり

素丸

素丸

素丸

素丸

白頰訓集

詞去帝去略

庚子
乙未
七十四

多登む。内氣言し神り氣

桃丸

流し流きしもの二又さらり

紫丸

七ツ餅八十のそ弁おまめきん

我泉

二篇一歳尾

雀すてらまししそくし梅の部

桃丸

たの氣お成て氣執ちり大毎日

空

孫二人強と強とてそ川日

漢水

おとよし実にはし梅の小百年

空

素乳のへるむ手梅や年の園

七十九

山の振枝もゆききん門の松

一足

白鳥や翠ふ透すと水の標

陽進ふ雲や縮小片一板

武州令所也

雪うらひ月雪部の難者家

巨象

魚も山松の葉の拂のり

そのの葉のそく付やそ川尻

寸毫

大馬をそるふ出ころ源拂

三元

樹るはし神泉おしはゆや川

桐花梅

雄雌多の果も相生の雲

瓢箪

悠然し丘隅ふ神を眺りて

魁梧

紅糸

又りふ柿の啼歌のあゝこ

瓢箪

年歌

舟猶とまきふ衣や一年世書

五

八十瀬川下瀬のくまの初日の書

八十一
壯志刺

馬雄

高嶺のうらふ居子徳も

素丸

通るもはるふせふし年世書

馬雄

岡あささの肉ふ鏡や市川の松

肘書

右樞

あはれ川見事実小むつ月

素丸

くまのふ小雪積はみしる馬雄

右樞

乙名の柔い其後や西の樞

素丸

萬葉本の一人の碎ふて西の

金樞

そや野山清の星の真ゆり

五

草子初冬小根抄ありし
解揚や草の他さうし梅

好和

冬

頌

坂町

年一丁の元増や門の松鏡

草堂

草子や及のとうり料の足

足りさうし及ふ己の年の梅

玉梅笛や大内山の初冬

素雲

草子や及のとうり料の足

解揚や草の他さうし梅

松竹はむいしや高の雲
草子の喜み子孫をうや雲の取
猪とくろく号てくはや大海月
其後小宮士や蘇波を門鏡
梅の葉やまゝ古き山如く根
草の尾も色保をく牛房り根
四年と應きいりもくや玉の雲
梅うもいれしそのまゝか
四年は直波羅や年忘

真秀

信家

草堂

頌
四年は日市(昔)より

二親ハ三姉ありや松の雲

仙里

りふらふらんを芽と吹雪解か

女房のよき葉やと

遠葉や子代と母の娘小松

令嗣

葉のよき葉やと

富ふはく梅のよ葉やと

女
長紅

柳ももんと

長紅

梅はれ初度きく福葉りか

澄志

毛くちをよきとてや猫の意

草の宿やあふ梅の望月秋

吹よの人の縁君し

花松

葉のよきや

織はめ目とく

寄ハもきるん香の福葉り

巻子

初ふかふふ子と出は柳

是くぬりと毎小送人師走織

之る市一席ふ月也。後候
 御月相不眠をさうらうら
 深移や一家の舟雨の雲さし
 遠業ふ所。旭やなう海
 舟月先一解さうらうら
 吾れと吐の市や一年さし
 日の氣も露の歩さし
 梅の市一東海ふあて南より
 滯らうて月も涙さし

青案
 文島
 休子

新州頌 濱町連

七丈八ッ橋 けつちの雲
長子信之は五郎
 梅活て新彼さうらうら
 さうらうら露の歩さし
 雲集ても上の雲さし
 掛とと御入活めさし
 あさ海も活し初日
 雲の雲さし初日
 雲と海さし初日

雨磑
 紫木
 湖池

花もふけ集て書き花の去
ふよみのもふ字の梅、石
花もふけ集て書き花の去
ふよみのもふ字の梅、石

頌
六間堀連

春宜樹
素丸

十字と傳ふ岩も遠菜
素丸

鳥も深金に弓眉池て
腫水

清帯出旅目立や神の梅
素丸

魚も書すの字もよのみさる
五

かきり湯元席小紅毒に腹り分
腫水

雪のまきや三きり小花読め
腫水

立厚も年か二尺や松かきり
腫水

老幼や子代将系り松の門
腫水

老松の雪も雪し宿の去
花伝

山の舟ふぬ花も柳の舟
花伝

橋移や定まりの去のり始
花伝

肥前長崎不易菴連

遠き此浦も花並や居候の群
 曲柳
 とも野や眼の初きもあつら
 候柳や一庭の上の月日星
 本のりく子合き。神く
 雲泉
 玄宗の雲のまゝ葉一う那
 大いふさくけさるや年木樵
 弟代とくは是してや神り氣
 東雲
 号ふあふか紙衣のまほく分
 無えと透し通さん年此閑

月小又あつたさるんた川り新
 一恵
 笑ひく山も溪のまほ解りか
 年此初や結むを根と暖き
 松宇
 子子根氣あつたさるんた川り新
 ④ 是れ神まや柳の地ひか
 初年や一園のまほあき者の坂
 梅柳一葉も小是し如雲のま
 怒雲
 心くもまは虚溪の笑ひは
 ねてはくまを隣や雪の梅

玉鉾の尾の光りやさの日記 燕里

新枝や赤らてくまじ玉の樂

今までの鬼も笑や第言酒

佐保娘や夜は産まうの雲 吾丸

舟の尾も小娘やふ柳

世の人小娘のまゝめや年持言

頌

御衣や加茂のま色をいふ 雲華齋 石漱

己らふふのくまじふおと松り柳

昔柳の百歩ふまふて上げぬ 推談庵 菊齋

さうあふは橋りけを根弄りふ

あふ玉や人の流るる汐りら 桂亭

あふ柳や七夜雪に淋ひてと

日の輝と昔葉の浮りや 古庵

お柳や玉露の光と象もあふ 孝休

あふ柳や背とあふる極の芝

あふ柳や乞食の雪りる花

万戸長あふは向ふ柳月か 鴉栗

梅雪や何雨も世色芳し

顔板や昔から少雪の年廿坂

まう今も年廿の雪や

うさふ能種の春もあきか

拙況の言人神や

消向ふ雪や

櫻帰ふ日も

あはれ

府波

無的

野生

眼の内へ合生も

花よりも

老を

酔ひ

庭子

江色

雲と

神柳

鏡け

猫の意

夜酔り

初日紫

年忘

如の雲

大晦日

の羞

人多

居布

乃中波寄美月日負

浦賀 京柏

天地のやうとありぬ牛井雲

岸少を麻いあしし梅のあ

燈火と月と照む中大海日

頌 下總鬼越老 馬雲

星石の女夢やまじ牛の雲

る色人もまゝもなきやぬり袋

えやゆゆ拍子に響二ッ 白屑

薫り来る毒く破るまふ

餅搗のまや中森毎の神かろ

文字造る苗代もろかろ 硯 秋 暉 陽

禮帳ふらふや涼夜の雲の艶

梅くると伝ふりのまやうきの雲 芦舟

二三梅林乃筈ひや藤花付藤

筆盤の中川 刺ぬや喜月片のあ 藤葉

何と云と雑魚屋や年此市戻

伝ふると中川に伝ふ中神丹茶 赤友

花と云る程もまらん藤花の雪

玉葉の葉一栢を木の白ひ

無抱婦

居蘇の代も吹部の色

赤丸

立居るるかたもけ裾深きて

赤角

青月合神のちるる市深衣の雨

無抱

老松や一葉をさやうふ代の雲

沢維

子壽為歳は年々ふり

赤丸

長宗を市一葉ふらも第ひ白

沢維

老人の種を年々や一年一葉

、

内左報も七めふ雑しく三や雲

娼婦

草小化して仕白くや雲の雨

大海日世の夕らふとふらむ

頌

木換所連

日の氣も一葉長一葉う牛

雨十

月小はほそてふと難るるあう

用のかた人もあふと年廿四

海も沈やふのく明の雲

晴賀

解るるあも松ふし梅の都

引居る国はあふと師走の

明初の空も緑の扇子り形 和風籠 遠州子
 山くくく遠来打扇平 高丸
 猶乃裾小あまぬ人の傍 漢水
 雨くも小志川人傍 雲乃雪 遠州子
 翠くと澄露煮し人十年情 立

頌

伊豆連

新

伊言

山原も山氣ふ小巾初日装
 父母の顔松くも巾柳鏡
 是るもと名も志ぬも所是る

えりも、あう生り人三流

岩科 古硯

又て居小の後に艦く柳

在の人衣白服う年持梅一本

仁科 糸鏡

之り巾、祝小神代の人三ろ

葉小あゆり、命巾、紙書

小海り我志小の昔海分又海日

梅左

風風も来つきやぐし初日装

昔く川や来ゆ小柳の家さう

年建ふ門やまぬの玉帯

梅咲て村本國土笑ひを免 葉 思友

雪の白ひく

雪の白ひく

雪の白ひく 金 梅児

雪の白ひく

雪の白ひく

雪の白ひく 上総小糸連

雪の白ひく 頌 上総小糸連 和清

雪の白ひく

雪の白ひく 伊丸

雪の白ひく 松麩

雪の白ひく 松麩

雪の白ひく 松麩

雪の白ひく 松麩

雪の白ひく 松麩

雪の白ひく 松麩

雪の白ひく 松麩

雪の白ひく 松麩

雪の白ひく 松麩

年彼と志川が先づ紙をうか

微白

之りや 親子乃初あゝこまり

院教

年志川只のきりりる楽や

飲酒

わき場を今初漫展て由きや

仙鳳

わうゝふゆふんとして除夜の言

吾流をりして此代ゆゝて明の言

梅咲まぬ世六太平小年此言

世の事小氣の後りりぬの言

子年とくして互居の師をが

頌

武川小岩連

今以 雲云

武隈の侍もぬたりや松飾

言や 奉てふ歌ととふ多一何

如言海も類杖 窓如年此坂

と川中や 既跡とて露の多

言實も妙名力あり年この布

初言や 志の藤是の子松しぬ

古小夜たふふ売や 年言小

梅とと路りうらや 日の白

歌 葉英

可也法言ふやみと響くり
七曲の玉の糸引け年十
門松や深倉の代も仁ま
人の香と何草推糸平
御多や舟の室を引念
門くふ神代の喜や
聖りのく膝ふ育らん
と足ふ法も人や

同 大川 連

竹間

美集

遠来ふるのくも
昔来ふる毎年の
鶴と対ふ花も
昔来ふるの
偽のなき日
年二夜
錦服ふあす
書まふ
門松や後ハ
松伏 葉舟
源花
法雨
交十
香地

す移り紙屑等々垣状
 人毎小仰りやけさの雲
 源抄や歌の仕舞とて是を
 高くと神目小玉路の相違なり
 遠より小気とし斗一年お希
 家々人の屋敷の雲の雲
 長生の去りり喜方やと云々
 同新方連
 川島山雲と告て政々々と
 金に
 雲水

松抄とてあく唐蘇の茶酒
 ともま酒とてはんぬの酒
 多々の山を住み深夜の間
 柳の山よりみ竹やけさの雲
 年お尾の尾振も不なる年
 人定一巻紙とて福壽科
 火神より印は友なり大晦日
 柿の湯泉と一才と云々
 ともまありり喜方やと云々
 河津
 鬼嵐
 更紗
 雲水

川にうらと居てあつらふと多勢始

奈旭

渡の言をいんふ付くく山ぬ

鳥群やあつらふ故も平けく

梅之

思ふもいふもあし年周意

えりや我身の離もの一居布

新 帛川

世と推し養ふは世し大晦日

川邊より子代まひくろ御り松

和光

花ももあつらふも同く思ふ

鼻之ふゆの原を難責り耶

今以 玉丸

清源小妻か川に記一原

頌

武外 栗橋連

月影の河に恵方や富士の言

舎以 南山

抱き子ふふ成るあり柳

深程て度ふと女は夜ゆふ

子令の抱ひ初布一福壽草

春と推し子も師走の定ま

笑り小舟東の布や日竹始

巾着糸の式面かし大晦日

東雲中居藤の沼砂玉の素

標山

沼水若ても昔ふふし年廿坂

水鷗

老の力も云三三ツ巾居藤の枝

又

還春の先と柳を寄る柳

又

又都の雨も不注し年廿是

月指

若歳や年なちかろ是拍子

又

都の鳥と花を射してまゝ

又

帰郷巾取云の鳴の袋

又

若歳巾取て固く丸小編

又

雨ふも遠く春不柳

又

若歳巾取巾取の年若市

又

静燈の傳へるは貝足候

竹裡

相寄りて入齒意を師走り分

又

今更けと風の鳥や日の始

鳥朝

年若市若市傳書巾取の園

何羨

若出度さ八葉十ヶの神且

又

白梅の素巾取ありく際夜の時

又

若く巾取若の素の梅

又

海とて故布不為ふ年の布

若歳巾笑顔も世は竹筒よの

雨川

筑波根巾羽子の子夢も年竹筒

青く是十ふれおのま

雨交

月花の巾子吹り年忘

頌

葛西奥戸連

園初く舞部く玉竹雲

上色

自笑

雲は不粧ひかき流柳

園緘る旅の一夜巾大海日

まゝの巾軍戎こゝのゆきも

一直

糸もく伸も人も柳

仍ぬぬの園巾大海日

奥戸

徳我

流のふ青流糸の初日

雲も巾一重あかぬり竹筒解時

巾巾子園小との巾師走

遠き巾小巾代と舞く根松

室戸

号巾ぬく女吹ぬむ梅の窓

川号と入糸の糸と思え

願も高き小ぢのむらさき金紙 献青

薫るも詩吟の半房の存意を

年辰小案接取の文と言ひ多

頌 同上平井連

えりやうをふまきしらぬ人か 土色

梅咲て時わたりその涙うか

白ふてを師走と笑ふ淡うか

一天下風流多むむの雲 既

えりけてぬきおく大毎日

聞てく小里村切や神の雲 加刺

井の意振ふ喜ありり里村も

頌 常州下相田連

八月ののほきの佳しふ代の雲 雲雲

十日月小世きるはきぬ雲の雨

け月小成てはる師走り那

東より應えあたり玉乃雲 雲角

い法も海もあふさぬ帯

雁移ふ喜なきはまぬ男系

松の琴洞へ縋り下りての云 吾田 如竹
昔の人の笑ひのむや年村梅

頌 上野 籠橋連

我々の福もあつて天の雲も青
柳乞のけふ逢降多てゆく

初春や富士きやうききき 秋笛

志向かり鴨もまほしき 百丈

京の祿の梅垣とあや 大晦日

ふはのけし梅くさや 谷路

菫園ふ芝田地 谷路

石寺の琴村 合浦

昔年村貞又 一主

多利も九十九 李邑

自出書もあつて 李邑

無名や 李邑

正川 李邑

年 李邑

頌 武州 神奈川連

鳥籠のまを推して 男 金 豊満

鳥籠も白鳥籠籠や朝の朝

天の戸をぬきし藤原の朝鳥籠

之を神の命を我こそは 朝鳥籠

人の命もあふまゝの交柳を

年々世園の香やかきくは

えりや 藤原の命を我こそは 朝鳥籠

福袋やとほくふのまのま

まはる 藤原の命を我こそは 朝鳥籠

勢ひのまの角文字や象始 鳥籠

梅咲やけの朝鳥籠のま

まはる 藤原の命を我こそは 朝鳥籠

三鳥籠 文字のまのまの初鳥籠 為歸

藤原のまのまのまの古鳥籠

八まのまのまのまのまのま 乙席

梅はるやけのまのまのま 佐郎

枇杷のまのまのまのまのま 藤原

月も日も入さのまのまのま

係五各

八十八

泉

元氣也、亦小なるや、小神り、
志松や、竹外並て、梅の園、
塙忍く、みちめ、
る、七を、
雨神の、夕自、
居、

月

頌

深川連

勢り奉

不三劫

臨、
陽、

生、
病、
開、
夢、
白、
神、
方、
折、
集、

女

梅之

系社

岩柙

えりや其編り事ふ初心り
蓮依

言やふふけのりや時
、

りやかけ終る程の事ふ
、

あゝやなる事あの時
、
新、訥哉

きふりや事くくあをさき
、

な是る人よき小筆のふ
、
蒲丈

何事やふ事も樂しき師之
、

頌 三千子のまき道ふ
、
窓雪

十六の時も聲しむの喜
、

中くと梅の事ふ合ふりあ
、

際り記五原の月や年々書
、

暎や阿とふ事と神を
、
牛馬 馬鳥

薬管ひと事ふきく事ん松月
、

遠るり乃あは年々開の家
、

神玉ふり流し事くけさの雲
、
文雅

老し椰子の事とねふ柳さ
、

大年と遠くけく時斗さ
、

美紫や巾帯事橋と破る行
、
腕丸

梅咲ぬ花より夏の音下り
 湯掛の垢まきと獅子の出立り子
 芝居の庭あぶらぐさの音上巻より二、
 随馬
 御座るや冷やと梅の影ふきみ
 左衛門若者や梅の影ふきみ
 遠き草や菊の湯るふり魚手あき、
 平列
 湯掛の湯まきと梅の影ふきみ
 初音や梅の影ふきみ
 口、
 梅の影ふきみと梅の影ふきみ

大梅や梅の影ふきみと梅の影ふきみ
 梅の影ふきみと梅の影ふきみ
 鼻芝の旗ハ小梅の影ふきみ
 延てり大梅の影ふきみ
 梅の影ふきみと梅の影ふきみ

頌
 房州 勝山蓮
 法々る梅の影ふきみの音
 宣明
 梅の影ふきみと梅の影ふきみ
 梅の影ふきみと梅の影ふきみ
 梅の影ふきみと梅の影ふきみ
 梅の影ふきみと梅の影ふきみ

除くると神を巨漣ふきかへり
世の中ふれんとてさるる神目付書
福神も福を祈らん年付布
ふれり門ふりし神目付書
崇徳

嬉しきよ年あふ言のちの積ぬ
さし向ふまを新こし神目付書
海空あそぶ雲の化装ひ
飛の海よりあつたや
備持や
物收む
鳥形
高瀬

山と我々等ひ合ふり
陸に物油のふ年もささるる
えり布のふのふりし
一と世のあさはと布原原の陸
大岩 親 冥風
平塚 琴糸

同 那古連

えり布 遠業の宮へ
中へくく年付布とて
遠業の宮へ
確りる名も師を
山花
柳堤

除くると神を巨漣ふりて

世の中ふれとさく神日村

福神も福やねん年村市

ふりて門ふりて神日氣

嬉しよ年あふまのち移ぬ

さし向ふま新こし神日氣

流ふれとま雲の化移ひ

飛の流りあの流やねのま

流移やう家取用て物收む

合林

宗溪

舟形

高瀬

山と我等ひ合たり 子も神 大岩 親 実風
 陸にぬゆゆふ年もさくさくぬ 平塚 琴糸
 えりやふのちのちりてさき神 平塚 琴糸
 一とせのまさはとち原原の陸
 同 那古連
 えりや 遠葉あまの 何ん 山花
 ちりて 年村屋とち様姫子 柳
 遠葉の流り 流やねの流 柳
 確りるも 師もや 高瀬

門表打新巾肉も福壽軒 栞
 舟旗一程寄書巾大馬 士
 吟梅と公鏡巾おろ雲 鳳
 門守の栢織巾さし栢 栢
 御金も瘡の歩巾巾糸の雲 栢
 研三子身新の縹巾氷の雲 栢
 神養の福壽海と神鏡 栢
 同子代連 栢
 人の帯もふの帯巾けさの雲 栢

細き針寺の自傍巾栢の巾 栢
 松と井の雲ふ身もかろる 栢
 新二つふ身新巾初ふふ 栢
 跡をと隠して身お糸る 栢
 巾の夕アと糸あけあふ 栢
 巾雪も糸糸と身お栢栢 栢
 えり巾あろう子似る人 栢
 身お糸巾遠ひ遠ひり糸糸 栢
 一の字の人の巾わけの雲 栢

秘呪と毒も如夜のあり大海月
 角の五々結麟と叫ん代の云 ヤカイ 幽石
 揚らけ善も静や 一年の書
 勇や カソタ けいれ木の神あり子 蓋ふ
 年もふ新小勇ひや木の部
 書ゆや イカキ 二世の志の象走り 宗旭
 愈乞も私より アカニ 年一乃梅の部 月叟
 年礼や又母あり月の象もこれ
 うゝ心と為結ふ年けあや

拉ひ能地と定めらん梅不露 モトラリ 陽石

同 吉原連

赤雲の梅吹く え名 内代乃云 逸雅
 え目や え名 中への鬼の笑ひ顔 呪石
 お小目と え名 巻ひさし え名 て師走ふか
 け尻の芥小信 え名 ぐや え名 主路の臍 放露
 荒草いふ え名 遠き え名 山 え名 して え名 乃 え名 年 え名 一 え名 り

同 市井系連

丹頂の友あり え名 居藤小 え名 明乃 え名 云 え名 宗露

心も又子母の好や、年々好ま

遠き中へ人の手路の信新し

ことごとく任小梅やとて心新

筆ももの虎のいさふや、明のま

荒き中へま癖の波の所縁き

神も、呼ぶ能名と別海人の心よ

世の人、不意もてや、深夜の梅

頌 上総

いよせ、初日や、梅山玉りま

白狐 舎以 鳥居

我々、ろくろあやや、年々好坂

膏、越てまの趣あり、子代のま

至も、ほりや、雪の、とてま

門松や、向合ふ、牛の、二柱

め、つ、初日や、深夜の、居、蘇、袋

え、日や、柳、小、近き、人、う、後

や、と、や、梅、不、忘、け、の、足、休、め

新、し、し、し、ゆ、不、善、や、け、ま、の、ま

氣、配、の、世、を、治、り、や、年、々、好、山

里樵

素翠

孤牛

玄孝

頌

常盤橋連

雌夷^{あま}の^こも^も魔^まて^の代^の云^云 波^な光^ひ

ふ^ふ小^こ智^ち恵^えの^まち^の中^の除^の雲^の

斎^いと^と平^{へい}の^まち^の中^の一^の硯^の 雨^{あめ}舟^{ふね}

酒^{さけ}積^つし^し牛^のと^とう^うし^し年^の計^の書^の

眼^{まなこ}力^のあ^あら^らさ^さる^るや^や弓^の始^の 芦^{あし}汀^の

色^{いろ}を^をて^てく^くの^の市^の女^のり^りが^が針^のや^や

頌

神田川連

遠^{とほ}き^きと^とお^おひ^ひ西^のと^と小^の殿^の系^の 竹^{たけ}賀^が

よ^よ菜^の野^のや^やり^りの^の雪^のの^の細^の腕^の

離^り露^のの^の肘^のの^の露^のふ^ふ小^のや^や衣^の砵^の

少^すや^やり^りと^と弟^のと^とふ^ふ二^の又^の浮^の

日^ひの^の心^の成^の志^の無^のふ^ふ何^のけ^のを^を解^のふ

翠^{すい}の^の葉^の葉^の雪^のふ^ふ精^のふ^ふを^を思^のふ

双^{すう}や^やり^りふ^ふる^る鏡^のの^の心^のの^の葉^の

了^{りょう}の^の結^のを^を古^のに^に柳^のの^の心^のを^をふ

幸^{さい}の^の世^のの^の心^のを^をふ^ふる^る赤^の鯛^の

様^{さま}の^の心^のを^をふ^ふる^る代^のの^の心^のを^をふ

松葉

蓮路

宗陸

三十三

白梅や子孫り夕小咲より

年の月小立ふき松乃より緑

る赤戸やまき海。去年此星

白雲たりいさく観る

乃乃介多ひつりや丘拂ひ

えり姑かや神乃西さまの

引巻の日延セりや新巻

赤丸ふ年納めりや初月筆

丸山と海返まかろや唐の門

イセ津

標文

梅と春を捨て砂や年村宿

頌 馬喰町連

日の本のうぶあしや雪のふ二 黄金桂洲

美叫や相下結清き村男

遠きや足守もれかき

清きふお流の都や割りけ

大佛のふふかしし号又ふ

くらくし海ふけて神日か

号や根存入言れ日の白ひ

お波

我江

又藤も二世抄さや 大二十日

さるもや 赤い藤さき 筒井

さ柳や 細く 赤い藤か 梨

梅咲て 師走の 赤い藤乃 中

又さるの 字けめや けさの 喜

藤中 小智恵つ 藤や 梅の 喜

藤好も 登り 男や 年々 喜

車弁の 喜も 冬 不明の 喜

喜も 赤い 藤さる 赤い 藤

文解

一風

我樂

自ら 小智斗 つまの 喜 去 藤

新巻 藤 喜と 藤さる 喜の 喜

正月と 藤さる 柳の 喜 藤

月満て 玉の 喜 藤さる 藤

藤さる 喜や 藤さる 藤さる 藤

梅り 喜 (素) 藤の 喜 藤

明か 藤の 喜 藤さる 喜 藤

藤さる 喜 藤さる 喜 藤

藤さる 喜 藤さる 喜 藤

羽鶴

秀他

庸和

元々ふとくらくら舞う年の園
 産屋と杉木無きう川原若
 海と川幸橋當年の芝居が
 え目やうふとくら舞う
 雲の心のゆるく舞う年の名跡が
 甲斐受の松の小人の囃子
 第の戸も師走や居る腰の七死
 明てけさるも有るわんか
 う海にぬき舞の走りよ年の川端

限洲
 八祭
 古友
 赤松

門松や女神男神の二はら
 糺年小細きしらもて年の市
 頌の歌 赤橋連
 えりや宝屋の舟床かきり
 橋下つらふさへ一房の柳
 昔葉は小せ川
 美やめさるるさるん神後
 今川さめふ日のうらふや梅のど
 朝あきさる乃坂や年花岡

宝庫
 赤岸
 赤松
 赤松

皆冬不出人なりん明の暮 素茶

雪や花をいふ日の咽渡し 素茶

夕暮の思の解り神りか 素行

舟をいふもよる中 素行

赤公は清濯とて云はれぬ 素行

鷹の人の輝や玉乃雲 眠舟

かき立の雨の時雨や 眠舟

年の屋をいふは夜後の清きか 眠舟

大舟や舟の清く向ふ雲 素茶

之丈輝の川も春の柳も 素茶

入舟の帆と納めたる年の雲 素茶

岩の流る水はあはれ月 素茶

あはれ春の暮の雪や 素茶

雪をいふは春の年 素茶

頌

春の舟も春の目言なりと 素茶

松の舟も春の目言なりと 素茶

伝連なるるそや、之経乃陸海そや 咫尺

七草中一草也、其地不遠、有日 檜

今あまのこゝろ、有日 檜

あまのこゝろ、有日 檜

川松の根、有日 檜

長宗寺、有日 檜

新多中、有日 檜

飛のふの筑の存、有日 檜

えりいら、有日 檜

桃牛

巴御

管阿

檜

咫尺

落のそ、有日 檜

梅のう、有日 檜

おのせ、有日 檜

登、有日 檜

か、有日 檜

砂、有日 檜

露、有日 檜

力、有日 檜

相洲、浦賀連

初り氣肥る半の毛色うすく
 射てるを彼へ矢の的や白楢
 赤も針を何れもさす松の身
 子の目せは常ん引船のれり
 云はれやけは日る古舟音
 大舟や並ぶとくは年月意
 居候酒あはれや噂よきなり
 何れも二花と花戀月
 涙抱て程もや雨と夢語り

把柳
 有柳
 文里

頌 石原連

えり布の籠りのころとて
 鶴の橋は程舟とて舟一歌
 太筭市に解ふ是のけら建
 れ巾着の波たるとて遠く
 一しものむい実の布大晦日
 福業や神代なるとて不
 赤いもよみ流の敵のをわか
 無きりとて月とて遠て思ふ

新妻
 風旭
 巨泊

之日のよふにまのやま菅原
臨み家より神もあやめ梅の枝
能く心いせむくろく藤をくみ

頌 新瓶 白陽菴連

神をわたり花より満ちて雲の神
あやしくいせむくろく藤をくみ
笑へしとふこころをわたり木を攀
吟 藤をわたりぬひたかあふまゝの
ま雨の白茅よりいそぎの雲
、 里東
、 湯友

大毎日こころを家の市かきん
福をわたり新ひききき松乃色
あふむや七相揃て筆乃中
條つきやいせむくろく藤をくみ
あふむやいせむくろく藤をくみ
折柳や淡菴ふり月 銀月
あふむやいせむくろく藤をくみ
家の咲顔や新の柳をくみ
あふむやいせむくろく藤をくみ

伝布

且樂

幸女

えりやいほの糸あけの松乃色 上野大原 志菴

東月吹や馬とゆき愛お年

健素まふ人のあやも師走

松竹の葉も涼し門の雲 廿八

東月吹や葉の借小園の梅

熊母と鱈もやと年の塩鯉

まふやま川素凧も玉棧

日の輝やいふと白小梅の香

美早や都とと一泊

志菴

芝妻乃新いめうや神展 撰流

雲乃白の目もく長き柳

梅乃葉と落よ一まや一年は真

ふ代やちよ神代傳ふや玉の雲 梧園

神代乃ゆき雲や梅の香

老の坂 十郎 夢世と新ん一年は鏡

静さる式よあやい此代の雲 風夢

雪やまよ氷のあや窓

谷乃戸の夏秋とん年想美

松浦の世に三河州より四河の世 其二

毛鷲舞ふて御歩剛とわく早

三月かきうんふ年の言の御

よの御や肥りの房の牧の物 時人

彼千代布 馬場とわ 二木の蔭と御交科 物寄 舎山徳布

扱色し雲為し さぬまの雨

頌 下総 布川連

元日やきく魁のまのり 舎山 野叟

雪がしく濯くまのかた まを 野叟

年玉とちしと足初ら二日月 好

長きやいふ まのり 女まひ

君う代や低さ 家 とも 好 家

是る まのり 行 まのり 年 好 主

初野や代へ 後 橋の ま 野

る まのり 小 まのり 柳 好 の ま

垣 まのり の まのり 師 好 下 好 松 好 の 好 月

ま まのり 川 好 布 好 尾 好 上 好 小 好 舟 好 の 好 ぬ 好 む 好 喜

梅 好 の 好 小 好 舟 好 帆 好 白 好 さ 好 と 好 後 好 り

古語をて取不師走の国面く那

系露

多んくよ仲くも杉木目打を那

秋嵐

在の夢と初不隠せとて年打雪

若松の傍りよのありおの云

弟の礼解ひよの貴不師走小

某青の葉も初合ふや娘く君

よも草ふ芝りのつけ記キトク

尺三のしと鹿素は房ひはるく那

呉く執をるるをほあし初家

九合目の不二と布いまん大毎日

浦いと喜うらら布雪の云

在の男むす小猪や年打雪

いさ能能座と雲ふや明の云

福くと雪の言や宝あつ

若ふは冷めて中ふあつ初急

ととととととととととととととと

男のふ葉も雪ふくくくく

えりや月日の初の執とめ

上子 為月 野叟 巨川 系露 秋嵐 文彦 巨川

河陽し是會りく初より白井素之

不二形り此庭のまけや平井書

頌 榊橋公庫連

清子男子をゆつて小第ひともり明の雲 榊

永さ日の丈る梅乃麩スハエ布

衣能る形流布雪の白まじり

えりやよりけりきけん 布川

毎の朝とる水路もまの雨

溜の雲鴨の羽撥や幸村書

あま玉のまき巻も福系く柳 昔泉

おし梅もふ白矣明乃障

宝瓶より流り梅の自在く糸

糸程ふ對ふ並ふや小夜系 波雅

去而ともかく流る流るく

蒸て流るふ竹垢や三流

玉嵐布乃引梅の笑ひ夢 台里

雪ハまきり進流るくまか

是々のの復あるくや宝瓶

靈芝生ふ^{高例の}穴の石や門の松

燕志

獨及り橋ふ海に玉巖

系丸

雲の月六日くこ静みあ

純平

梅咲やう網多き日の草

燕志

福壽軒玉地くお蒼り

全

居換^{高例の}波や^{高例の}石の相生家の松

文呂

崖^{高例の}石の麓りも廣野一川

系丸

橋^{高例の}下りの数小日の筋了^{高例の}野

燕志

垣あ^{高例の}茶て香も福よ^{高例の}心梅の印

文呂

年波^{高例の}巾着^{高例の}て悦民布網^{高例の}さう地

智丸

二年^{高例の}舟廊^{高例の}も^{高例の}糸^{高例の}巾^{高例の}福壽軒

英眉

奥い長家^{高例の}多^{高例の}た^{高例の}彈^{高例の}神^{高例の}の^{高例の}琴

系丸

大^{高例の}山^{高例の}中^{高例の}へ^{高例の}ん^{高例の}雨^{高例の}後^{高例の}の^{高例の}雪^{高例の}若^{高例の}ふ^{高例の}り^{高例の}く

文呂

雪^{高例の}の^{高例の}妻^{高例の}も^{高例の}存^{高例の}り^{高例の}朝^{高例の}の^{高例の}藪

英眉

破^{高例の}ら^{高例の}ら^{高例の}小^{高例の}舟^{高例の}子^{高例の}の^{高例の}和^{高例の}合^{高例の}や^{高例の}年^{高例の}廿^{高例の}五^{高例の}

全

筆^{高例の}引^{高例の}く^{高例の}墨^{高例の}と^{高例の}唱^{高例の}る^{高例の}神^{高例の}巻^{高例の}く^{高例の}布

英子

白^{高例の}河^{高例の}く^{高例の}く^{高例の}う^{高例の}た^{高例の}糸^{高例の}丸^{高例の}の^{高例の}糸

系丸

上下^{高例の}小^{高例の}舟^{高例の}艇^{高例の}の^{高例の}兼^{高例の}煮^{高例の}飯^{高例の}巻^{高例の}て

純雅

老よりととをりしひのまのま 河化

松原の一曲より雪解り事

年ちのちの月つきもまきまの色りり

句氣皆ありとや 福壽堂 人

まや我ふ数とや谷後し

中より中用とて多難更

頌 桐川 深谷連

麻羽あまの日の丸嘆やあまのま まが改 卓二

年波や紫しきり伊勢丹垣縁

新しきゆも吹りし 傍 ま東 柳砂改 槽声

昔は樂の月け襷や多たま

怪しいと昔流りたる川鳥 硬音改 扇志

福余ふ年波のまかたりり

吳 維橋ま

紫乃位定めや 何川 たふ清

梅市今あきしむあし一筋赤

石の火も赤あね年け紐よけ

まぬるややけりしの鏡り子 於静

掬まのり笈ひし雲乃水ふ
 水底を揺りし出たや宝船
 久々の喜方定めし神日乃
 栂う水眼の葉と赤ゆるが
 流まのり中流もや平水揺る
 君志の憂きも一しるしの
 雪もとろき際と栂の枝
 一もとほひとろく深夜の舟
 天地の二系もまろく川り水
 牛園

月く字んしけし 銀月
 与れお魚中りし幸け志はり

頌
 夕霞しき月か 極や月乃雲
 美奈ふ分仲の夜白の美の物
 居藤の帯や 桃葉扇葉の葉
 らくく小床よとの障り大海日
 玉振の文字も栂や 沙塵日
 雲かつれ 塵收ん 雲陸帯
 原乙考 逸窓
 源川 尾角
 景川

正
 二

長くて徳の幸をうけ取交ふ
まじくとも愛慕をこぼす
妻仙

悪礼小物も合ふるの事

八重雲と吹拂ひをそと神日の事
津野弘宗

祝詞小合と能事の一夢
系丸

ウチをうりやうき流あふ柳の事
系徳

喰ひ飽く菜不入院夜の花の事

頌 豊州 梓葉連

さう氣のほふ可なり 齒牙傍 遠舟

初くの只白入斗を梅下印

梅搦や向と歌多は御月

中ノ羽子の敵と追め分は信が
禁路

二之柳梅も信ふ神言う那

信真し別ゆき高そ大毎目

引揚るる年お雅や居候哉
戸帆

老所とて康あり候守梅の事

乃とてお跡やう向や小毎目

戦後 山白

おのれは... 空原の如き
あり... 繁るも分明

か... けり... 山麓を

吟みて... 長閑

茶丸

園乃... 牛

徳布

結ひ... 膝

我泉

山... けり

高海

よ... 后の月

植洲

浦... けり

菊野

福... 衣

都群

叙... 村の傍

茶栞

如... 馬

我江

三... けり

吉所

弓... 一

茶雲

古... 板

茶陸

叫... の月

嘘

末... 友

茶海

古... 後

六徳

藤... 茶

茶如

多きくむし小油のあつた

菊

田中一丸森のち小雲雨

菊

二 物介とそは泥の物

大

吾多々の夢乃多小

海

ふかぬの情乃多

何

流乃多

江

中龍も七日能舟の鬼

陸

拂小本

柳

美不自乃

柳

天一天上初時鳥

鳥

多

雲

利

雲

松乃雪拂

雲

十

静

惟

静

只

静

新

静

鳩

静

松と竹のまじりたるもかたじけなく
在の人も垣り利の事もさるる

素心
吾丸

大尾

年木割る事なきはくらく大晦日
條拂や圍ひる事の大を氏

我泉
徳布

我春と七尺出小師走の那
年々や輝小きく市村多

序跋
野叟

紫竹戸や心持風不鬼中
及板小きく口詠子年と行

弟茂
石漱

いふことさるる事多し多事さるる業
淺きと深きとを言ふ海州

逸窓
秋之

我川に魚と青と梅と花
床と遠く不頼師や年持燕と

直明
逸雅

鶯鶯了る本けり事や昔事
年付るや一其に破り割

梅洲
三級

其の世の善一也事年付り世衆

管何

